地区名　刈谷　学校名	刈谷市立刈谷南中学校	執筆者	杉　本　尚　史
テーマ 単元名	**社会的課題に対して自ら考え、多様な他者と協働しながら課題解決に向かう生徒の育成**		

1　はじめに

現代社会において、福祉や防災の問題は、すべての人が直面し得る重要な社会課題であり、その解決には多様な視点をもつ人々が協力し合う力が求められる。しかし、教育現場において、生徒が主体的に学び、他者と協力して課題に取り組む姿勢を育むことは依然として難しい課題となっている。

本学年の生徒は、定期テストなどの個人目標に対しては熱心に取り組む一方で、自分の考えに固執しやすく、他者の意見や視点を柔軟に取り入れることが苦手な傾向が見られた。そうした中で、防災という社会的課題は、生徒が「自分ごと」として捉えやすいテーマであり、地域の方々との協働授業を通じて、社会的課題解決に向けた学びを具体化するのに適した題材だと考えた。防災というテーマを通じて主体的に行動する場面では、失敗を恐れず積極的に挑戦する姿が見られたため、このテーマでの実践を行うことで、より深い学びを引き出せると考えた。

実践前のアンケートでは、「自分の住む地域の避難場所を知っている」生徒が約91％と高い割合を示した一方で、「特性のある方への支援方法を知っている」生徒は約22％にとどまった。また、「災害に対する不安がある」と回答した生徒は約88％おり、「災害時の対応について学びたい」と回答した生徒は全体の約75％にのぼり、防災への関心の高さがうかがえた。しかし、「災害時の対応に自信がある」生徒は約18％にとどまり、実践的な学びの必要性が明らかになった。

こうした背景から、本研究では、生徒が福祉や防災を「自分ごと」として捉え、多様な他者と協働する中で学びを深める過程を明らかにすることを目的とし、「社会的課題に対して自ら考え、多様な他者と協働しながら課題解決に向かう生徒の育成」を主題として実践を行った。

1　研究の目的

（1）目指す生徒像

○社会的課題に対して自ら考えることができる生徒

○多様な他者と関わりながら、協力して課題解決に向かう生徒

（2）研究の仮説

仮説１　社会的課題を捉える段階において、知識を深め自らの理解を整理することができれば、社会的課題に対して自ら考えることができるだろう。

仮説２　他者と関わる段階において、多様な方と話し合いを通じて交流することができれば、多様な他者と関わりながら課題解決に向かうことができるだろう。

2　研究の方法

（1）対象となる単元・単元目標について

本研究の対象となる単元は、総合的な学習の時間「福祉と防災」である。この単元では、資料１の単元目標を設定した。

資料１　「福祉と防災」の単元目標

・自分の思いや考えをもって課題を追究し、新しいアイデアを生み出し、問題に柔軟な解決策を見つけることができる。（知識・技能）（課題に気付く力）

・意見を交流し、他者と協力しながら異なる意見やアイデアを受け入れ、尊重しつつ思いや考えを深めることができる。（思考・判断・表現）（考えを深める力）

・分かるようになったこと、できるようになったことや学びの有用性を実感し、他者の視点や感情を理解・共感し、自分の感情や価値観と照らし合わせて他者との関係を築くことができる。（主体的に学習に取り組む態度）（学びを表現する力）

（2）仮説に対する具体的な手だて

ア　仮説１に対する具体的な手だて

手だてＡ　防災に関するアンケートを行い、社会的課題への自己認識を深める。

社会的課題への自己認識を深めるために、防災に関するアンケートを実施する。アンケートを通じて防災意識の現状を可視化した上で、新聞記事や道徳の授業を行うことにより、福祉や災害に関する基礎知識を得ることで、社会的課題に対して自ら考えることができるだろう。

手だてＢ　災害に関連する状況を理解する場を設定する。

刈谷市役所危機管理課や中日新聞ＮＩＥの方々の講演会を通じて、災害に関連する状況を学び、知識の拡充を図る。講演の前に「どのような視点を持って話を聞くべきか」について考える時間を設けることにより、社会的課題に対して自ら考えることができるだろう。

イ　仮説２に対する具体的な手だて

手だてＣ　社会的課題をテーマにしたグループ討論を実施する。

災害発生時の課題や対処の方法をグループ討論形式で行う。避難所運営ゲームで防災教育について話し合うことにより、他者と協力しながら異なる意見を受け入れ考えを深めることで、多様な他者と関わりながら、協力して課題解決に向かうことができるだろう。

手だてＤ　地域の方や特性のある方と交流し、体験を共有する場を設定する。

避難所開設体験を実施し、地域の方々や特性のある方との協働授業をすることで、福祉と防災の実践的な視点を学ぶ。また、お礼の手紙を書いたり、新聞にまとめ、発表したりする場を設けることで、多様な他者と関わりながら、協力して課題解決に向かうことができるだろう。

（３）単元計画

単元計画「福祉と防災」　全16時間

仮説１の手だて　手だてＡ…防災に関するアンケートを行い、社会的課題への自己認識を深める
手だてＢ…災害に関連する状況を理解する場を設定する

仮説２の手だて　手だてＣ…社会的課題をテーマにしたグループ討論を実施する
手だてＤ…地域の方や特性のある方と交流し、体験を共有する場を設定する

段階	学習課題	具体的な手だて
知識を深め、自ら考える	○防災についてのアンケートに答えよう。（第１時）	・防災に対する現時点での理解の度合が分かる項目を設定し、授業後に比較できる項目も含める。手だてＡ
	○新聞や道徳から福祉や防災について知ろう。（第２～４時）	・新聞記事「被災した生徒にどう寄り添う」、道徳「ひまわり」を教材として、福祉と防災の基礎知識を得る場を設定する。手だてＡ
	○防災に関する講演を聞こう。（第５～７時）	・刈谷市役所危機管理課、中日新聞 NIE 事務局など、専門家の講演を聞く場を設定する。手だてＢ

⇨

段階	学習課題	具体的な手だて
多様な方と交流をして、課題解決に向かう	○避難所運営ゲームで災害時の学校について考えよう。（第８時）	・災害発生時の学校での役割分担や課題を考えるために、避難所運営ゲームを用いた話し合いの場を設定する。手だてＣ
	○中国と日本の防災教育を学ぼう。（第９～10時、14時）	・社会科「中国と日本の防災教育」から、地震を地球規模の課題として考え、これまでの学びをつなげる場を設定する。
	○学校の避難所開設を体験しよう。（第11～13時）	・地域の方や特性のある方との交流を通じて、体験を共有する場を設定する。手だてＤ
	○体験したことを新聞にまとめ、発表しよう。（第15～16時）	・避難所開設体験で得た学びをふりかえり、新聞にまとめて相互発表する場を設定する。手だてＤ

（４）抽出生徒Ａの実態および期待する姿

生徒Ａは、自分の地域の避難場所を知っているものの、災害対応に対する自信がなく、「非常に不安」と感じている。また、特性のある方への支援方法についての知識が乏しく、防災時の具体的な行動に課題を抱えている。一方で、災害時の対応を「学びたい」と積極的な意欲を示して

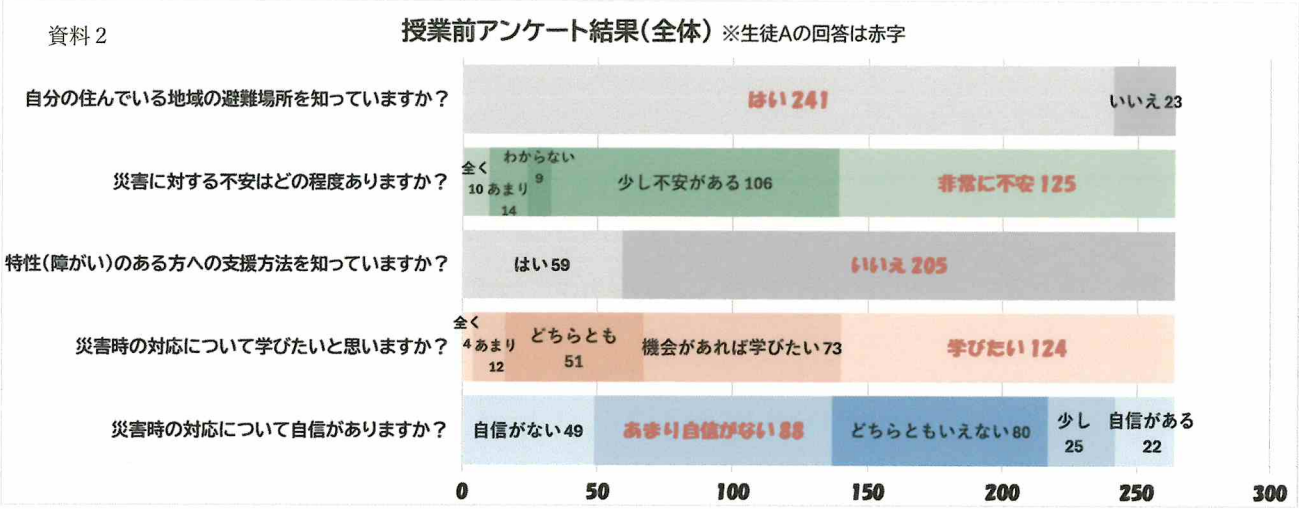
いるため防災を「自分ごと」として捉え、防災意識を深める姿を期待する。

４　実践と考察

（１）社会的課題に対して自ら考えることができる生徒Ａ

ア　アンケート結果から見る生徒Ａの防災意識の現状

資料２



防災意識の現状を把握するために実施したアンケート（資料２）では、生徒Ａは「自分の住んでいる地域の避難場所を知っている」と回答し、これはクラス全体の回答傾向と一致していた。しかし、「災害時の対応について自信がありますか？」では「あまり自信がない」と回答し、具体的な行動力に対する不安が見られた。また、「災害に対する不安はどの程度ありますか？」では「非常に不安」と答え、全体の88％が「不安がある」以上を選択した傾向とも一致した。この不安は、「特性のある方への支援方法を知っていますか？」で「いいえ」と回答したことから、知識不足が要因であることが示唆された。一方で、「災害時の対応について学びたいと思いますか？」では「学びたい」と積極的な回答をしており、防災教育への学習意欲が確認された。

これらの結果は、防災意識が生徒Ａを含む多くの生徒にとって「自分ごと」として形成されつつあることを示している。しかし、防災に関する知識不足や具体的な行動力の欠如が、不安や自信のなさに直結している状況が浮き彫りになった。この現状は、形式的な訓練の繰り返しに留まる防災教育の限界を示していると考えられる。一方で、学びたいという意欲が見られることは、防災教育を通じてさらなる成長が期待できることから、防災意識を段階的に深化させる学習を展開していく必要性があると判断した。

イ　新聞記事や道徳の授業から福祉や防災を自分ごととして理解する生徒Ａ

災害時におけるメンタルケアを学ぶために、新聞記事「被災した生徒にどう寄り添う」を配付した。生徒Ａは授業の振り返り（資料３）で、「自分まで不安がっていると相手も不安になる」から「明るい言葉をかけてあげる」と記し、「心のケア」を意識した具体的な対応策を考えていた。このことから、生徒Ａは単なる知識の習得にとどまらず、災害時の不安を軽減するための実践的な行動指針を形成しつつあることがうかがえた。

資料３「被災した生徒にどう寄り添う」 生徒Ａの振り返り
自分まで不安がっていると、相手ももっと不安になってしまうから、できるだけ自分は不安がらないで、相手を安心させられるように「いっしょにがんばろう」とか、明るい言葉をかけてあげる。 体のケアだけではなく、心のケアも大切だと思うから、心の不安をなくすために、被災したときのメンタルケアが大切。

次に、災害による喪失感や命の尊さを深く理解するために、道徳「ひまわり」を題材として扱った。生徒Ａは振り返り（資料４）に「ささやかすぎる日々の中にかけがえない喜びがある」と記した。このことから、この歌詞に深く心を動かされた様子が見て取れた。また、清和さんの物語を通して、「あたり前だと思っていた日々に、たくさん感謝して生きていきたい」という気持

ちを抱くに至り、価値観に変容が生じたと考えられる。

ウ　専門家の講演会を通じて、災害に関連する状況を学び、知識の拡充ができる生徒Ａ

新聞記事や道徳の授業で得た価値観や感情の変容を、専門家の講演を通じた具体的な知識の補強によって現実の行動力につなげるために、専門家を呼ぶ授業を行った。

資料４　道徳「ひまわり」生徒Ａの振り返り
「いのちの歌」が心に残りました。東日本大震災で家族を失ってしまった清和さんが選ぶほどの歌ということだから、どんな歌なんだろうと思っていたけど、思っていたより心にグッとくる歌でした。 特に、「ささやかすぎる日々の中にかけがえない喜びがある」という歌詞がグッときました。この歌詞からあたり前のことだと思っていた日々や今このいっしゅんの時がどれだけかけがえのないものであふれていることを気づかせてくれました。なので、この歌を聞けて良かったなと思うし、これからは、あたり前だと思っていた日々に、たくさん感謝して生きていきたいなと思いました。

刈谷市役所危機管理課の講演会に向けての事前学習（資料５）では、生徒Ａが、「周りの人は、どうやって助けてどのような声かけをしていたのかを意識して聞きたい」と書いた。このことから具体的な目的をもって講演に臨む主体的な姿勢が分かる。

講演会後の手紙（資料６）では、「特に印象に残っているのは、『自助』『共助』『公助』の三助と、実際に地震が起こっている動画です。」「刈谷でも同じことが起こると思って、食べ物や家具の固定をし、備えていきたいです。」と書いた。このことから、防災の概念を自分の地域に当てはめて考える認識の広がりが見られた。

資料５　刈谷市役所危機管理課講演会　事前学習　生徒Ａ
話をしてくださるのは、元自衛隊の人達だから、どんなことを意識して災害と向き合ってきたのかとか、自分だけではなくて周りの人は、どうやって助けてどのような声かけをしていたのかを意識して聞きたいです。また、スライドショーには書かれていない、プラスアルファで説明してくださることがあったら、そこをしっかり聞いて、より災害への意識を高めたいです。

資料６　お礼の手紙　生徒Ａ
今日は、とても為になるお話をありがとうございました。私が特に印象に残っているのは、「自助」「共助」「公助」の三助と、実際に地震が起こっている動画です。三助では、自分の命を守ること、それから周りの人を助け、自衛隊の方々が助けてくださることという流れが分かりました。動画では、思っていたよりも揺れが強く、家具や建物が壊れたり倒れたりしていたので、刈谷でも同じことが起こると思って、食べ物や家具の固定をし、備えていきたいです。

災害時の情報の大切さを知るために、中日新聞ＮＩＥ講演会の事前学習（資料７）を行った。生徒Ａは、「フェイクニュースにあったことがない」としながらも、「対処法や、フェイクニュースの見分け方について、特に意識して聞きたい」と記した。また、「『フィルターバブル』という言葉を初めて見たので、この言葉の意味が知りたい」と書き、さらに、「もし災害が起こった時にフェイクニュースまで一緒に流れてしまったら、もっと混乱してしまう」と問題意識をもって、「常に冷静になり、物事を落ち着いて判断できるようにすればもっとマシになる」と仮説を立てた。講演会後のお礼の手紙（資料８）では、「特に覚えておきたいなと思ったのは、『ステルスマーケット』と、『そうかな　だいじかな』という言葉」と書き、それらを災害時の行動にどのように適用するかを考える姿勢が見られた。

資料７　中日新聞ＮＩＥ講演会　事前学習　生徒Ａ
私は、フェイクニュースにあったことがないので、実際にあってしまった時の対処法や、フェイクニュースの見分け方についてを特に意識して聞きたいです。あと、黄色のプリントに書いてあった、「フィルターバブル」という言葉を初めて見たので、この言葉の意味が知りたいです。そして、もし災害が起こった時にフェイクニュースまで一緒に流れてしまったら、もっと混乱してしまうと思うから、そこをどう気をつければいいのかも意識して聞きたいです。私は、常に冷静になり、物事を落ち着いて判断できるようにすればもっとマシになるのかなと思ったけど、NIE の方の意見も知りたいと思いました。

資料８　お礼の手紙　生徒Ａ
講演会では、とても為になる話をありがとうございました。私が特に覚えておきたいなと思ったのは、「ステルスマーケット」と、「そうかな　だいじかな」という言葉です。ステルスマーケットは、ブランドや会社からお金をもらったから広告をするなど、お金まで関わってきていて、怖いなと思ったので気を付けたいです。そうかな　だいじかなは、フェイクニュースを見分けるのにとても役立つと思ったので、もし災害が起きてフェイクニュースまで流れて混乱しそうになったら、この言葉を意識して、冷静に、柔軟に対応できたらいいなと思いました。

これらの記述から、生徒Ａは災害時に冷静な判断が求められることを強く認識し、情報の選別と行動計画の重要性を学んでいることが分かる。特に、「そうかな　だいじかなは、フェイクニ

ュースを見分けるのにとても役立つ」として、「もし災害が起きてフェイクニュースまで流れて混乱しそうになったら、この言葉を意識して、冷静に、柔軟に対応できたらいい」と具体的に考えていた点は、学びを行動に結びつける力が育まれていることを示している。このように、講演会を通じて得た知識を自身の行動計画に活用する姿勢が確認できた。

（２）多様な他者と関わりながら課題解決に向かうことができる生徒Ａ

ア　避難所運営や防災教育に関する協働的な学びを通じて成長する生徒Ａ

講演会での学びをもとに、避難所における多様なニーズへの対応を考える力を育むため、避難所運営ゲームを計画した。事前に行った刈谷防災ボランティアの講演会で生徒Ａは「私たち中学生も何かボランティアできることはあるのか」「ボランティアをしてきた人たちは、どんな思いで活動をしてきたのか」と問いをもって臨んだ（資料９）。講演後には「地震の怖さとボランティアでの取り組み」という実例を通して、「少しでも役に立とうと動いているボランティアの人はすごい」と活動の意義を深く理解し「これから起こりえる災害への備え」と記すなど、災害への意識が一層広がっていた（資料10）。

講演での学びを踏まえた避難所運営ゲームでは、避難者の多様なニーズに応じた空間の配分や支援方法について考えた。生徒Ａは「階段があるから難しいと思うよ。とりあえず、一階の卓球場に物資を置いておけば、体育館（二階）にもすぐ運べる」と、建物構造を考慮した現実的な案を出し、「妊婦さんや乳幼児連れの人は、まず静かで広いスペースが必要だよね。他にも、高齢者や障がいのある人の優先順位を考えないと」と他者の視点も取り入れた（資料11）。このような発言から、生徒Ａには他者との協働を通じた柔軟な問題解決の意識が育っていることがうかがえる。さらに、お礼の手紙（資料12）では、

資料９　刈谷防災ボランティア講演会　事前学習　生徒Ａ

災害が起こってしまって実際に被災してしまったときに、ボランティア活動ではどのようなことをしてきたのかや、私たち中学生も何かボランティアできることはあるのかを意識して聞きたいです。そして、ボランティアをしてきた人たちは、どんな思いで活動をしてきたのかを聞いて、私もボランティアをやることになった時に心がけてみたいなと思いました。

資料10　お礼の手紙　生徒Ａ

今日はとても為になるお話をありがとうございました。この講演で分かったことは、地震の怖さとボランティアでの取り組みです。能登半島地震では、人口が三分の一ほどに減少してしまったり、建物の解体が進展していなかったりと、とても大変だけど、そんなときにもめげずに、少しでも役に立とうと動いているボランティアの人はすごいなと思いました。そして、これから起こりえる災害への備えもしっかりとやっていきたいなと思いました。

資料11　避難所運営ゲーム内会話

講師：まず、体育館のゾーニングを決め、通路、受付、本部の配置を考えましょう。その後、カードを使って避難者の振り分けを進めてください。
生徒Ｃ：金工室や木工室は刃物が多いから危なくない？この部屋に人を入れるのは避けたほうがいいかも。
生徒 Ｂ：確かに。それに、保健室は一階のほうがアクセスが良いけど、体育館が二階だから避難しにくいよね。
生徒Ｄ：でも、体育館って広いから、できるだけ活用したいよね。でも、車椅子の人とかはどうする？
生徒Ａ：階段があるから難しいと思うよ。とりあえず、一階の卓球場に物資を置いておけば、体育館（二階）にもすぐ運べるでしょ。
生徒Ｃ：うつ病の人は、騒がしい場所はダメそうだから、静かな教室に案内する？
生徒Ａ：それなら、美術室がいいかも。絵を描けるスペースがあるから、気分転換にもなるんじゃない。
講師：いいアイデアです。ただし、教室のスペースが限られている場合にはどう対応するかも考えてみてください。
生徒Ａ：スマホを充電したい人も来てるけど、停電中だしどうする？ブレーカーの場所も知らない…。
生徒Ｄ：講師の人に聞いてみたら？あと、妊婦さんが来てるけど、特別な場所を確保するべきだよね。
生徒Ａ：妊婦さんや乳幼児連れの人は、まず静かで広いスペースが必要だよね。他にも、高齢者や障がいのある人の優先順位を考えないと。
講師：とても良い話し合いです。それぞれのニーズをどう優先順位づけしていくかが、課題解決のポイントになります。

資料12　避難所運営ゲーム　お礼の手紙　生徒Ａ

先週は、とても為になるお話をありがとうございました。避難所運営ゲームをやってみて、ボランティアをしている人目線で物事を考え、最善の案を出すことを瞬時に判断しなければいけなかったのでとても大変でした。特に、重症のけがをしている人や高齢者、スマホを充電したいと言ってくる人たちには困りました。(中略) ゲーム中はたくさん時間があったけど、実際に災害が起こると時間もないし、色々なトラブルも起こるかもしれなくて混乱してしまうと思うので、まずは落ち着いて、ボランティアをすることになったらこのゲームを思い出して、できる限りのことを精一杯やれたらいいなと思いました。そして、一人一人に配慮と温かな心を持ち、うつ病など大人数でいることが苦手な人にも理解をもって接したいと思いました。

「重症のけがをしている人や高齢者、スマホを充電したい人たちには困りました」と記し、加えて「一人一人に配慮と温かな心を持ち、うつ病など大人数でいることが苦手な人にも理解をもって接したい」と書いていた。これらから、生徒Aはゲーム内での気付きを基に、多角的な視点から課題を捉え、防災活動における自分の役割を具体的に理解しようとする姿勢が見て取れる。

資料13　避難所開設体験会話　生徒A（抜粋）

生徒B：「じゃあ、今から簡易ベッドの方に案内するね。私の肩に手を置いて。前に一歩進んで……そのまま5歩進むと段差があるから、注意してね。」
生徒A：「分かった。（慎重に進む）……あっ！何か足に当たった！」
生徒B：「あ、ごめん！ベッドの下に物があったみたい……気をつけて。」
ガイド：「こういう場合は、障害物の位置や形を事前に伝えることが大切です。それから、サポート役の方は進む方向や歩数を正確に伝えると、より安全に案内できますよ。」
生徒B：「はい、次からは気をつけます。」
生徒A：「ベッドの高さとか幅とか、もっと教えてくれたら助かるかも。」
生徒B：「了解。高さは膝くらいで、幅が広めだよ。少し触ってみて。」
生徒A：「ありがとう、触るとイメージしやすいね。」

資料14　避難所開設体験　お礼の言葉　生徒A

今日は、貴重な体験をさせてくださりありがとうございました。今回の体験で感じたことは、サポーターになるときは避難者側の気持ちを考えて行動することが大切ということと、避難者の方になると思っていたより怖いということです。サポーターをやるときに、私はベッドの情報を伝えきれずに寝転ばさせてしまいました。そして、実際に避難者側をやってみると見えないので、形が分からず、今どこにいるのかもわからなかったので、相手の気持ちを考え、優しく周りの情報を教えてあげると安心するので、実際にやるとなった時はそうしたいです。

イ　地域の方々や特性のある方との協働授業をして課題解決に向かう生徒A

地域住民や特性のある方々と直接関わりながら協働し、防災における課題解決を体験的に学ぶため、生徒と地域が連携した避難所開設訓練（中学生版）を実施した。

避難所開設体験（資料13）では、生徒Aと生徒Bが視覚障がい者の役とサポート役を交互で務めた。生徒Aは、「ベッドの高さとか幅とか、もっと教えてくれたら助かるかも」と感じ、情報の伝え方の重要性を実感していた。ガイドの指導からは、「進む方向や歩数を正確に伝えると、より安全に案内できますよ」と学び、両者ともに他者の立場を体感しながら、協働の中で課題を把握する視点が育まれていた。

また、お礼の言葉（資料14）には、「サポーターになるときは避難者側の気持ちを考えて行動することが大切」「避難者側をやってみると見えないので、形が分からず、今どこにいるのかもわからなかった」と記しており、不安を軽減するには「優しく周りの情報を教えてあげる」ことが必要だと理解していた。生徒Aは体験を通じて視覚障がい者の立場を深く理解し、支援のあり方を主体的に考えるようになっていた。

資料15

年）　11月15日　金曜日　　第2403号

避難所開設体験新聞

視覚障碍者に寄り添うために

視覚障碍者1ブース
刈谷南中学校
1年7組　7班メンバー
生徒A

↓視覚障碍者が使う道具たち

避難所開設体験では、生徒で目隠しをして、視覚障碍者になりきりながらサポーターがいろいろな場所へ誘導するという体験をした。各自で手をつないだり、肩を持ってあげたりするなどの行動が見られた。講師の話によると、最初に、誘導する前に自己紹介をし、周りの情報を細かく教えることが大事だそうだ。例えば、ベッドで寝かせる時は、高さ・奥行き・幅などの情報である。歩く時も、何歩ほど歩くかを説明したりすると良いという。説明をするときには、優しくゆっくり、大きな声で言うのが基本である。また、サポーターが不安そうにキョロキョロしていたりすると、障碍者も不安になってしまうため、自信をもって前を向いて誘導することを意識するとさらに良くなる。これらのことから、自分がどうすればいいのかを考えるだけでは、安心させてあげられる誘導が出来ないことが分かる。このように、視

盲導犬や白杖

皆さんの中には、視覚障碍者と言われて、盲導犬や白杖の人をイメージする人が多いのではないだろうか。まず、盲

体験後に作成した新聞（資料15）では、「誘導する前に自己紹介をし、周りの情報を細かく教えることが大事」とまとめ、「高さ・奥行き・幅などの情報」「説明するときには、優しくゆっくり、大きな声で」「自信をもって前を向いて誘導する」など、具体的な配慮の方法を整理していた。これにより、生徒Aが実践的なコミュニケーション技術を身に付け、相手の安心感を高める行動を意識していたことが分かる。

資料16　発表をしていて、気づいたこと　生徒A

私が作った新聞は、体験会の中で特に大事だと思ったことだけを書いたけれど、発表をしてみると、自然と大事なことの中でもさらにもっと大事なところを選んで発表をしていました。（中略）このことから、自分にしか分からない知識を相手に伝えることは大事なんだなと思いました。これは、災害の時にも役立つと思います。急に災害が起きて、分からないことがあって困っている人がいたら、自分のもっている知識を相手に渡すことだってできると思います。そういうことを学ぶことができて良かったです。

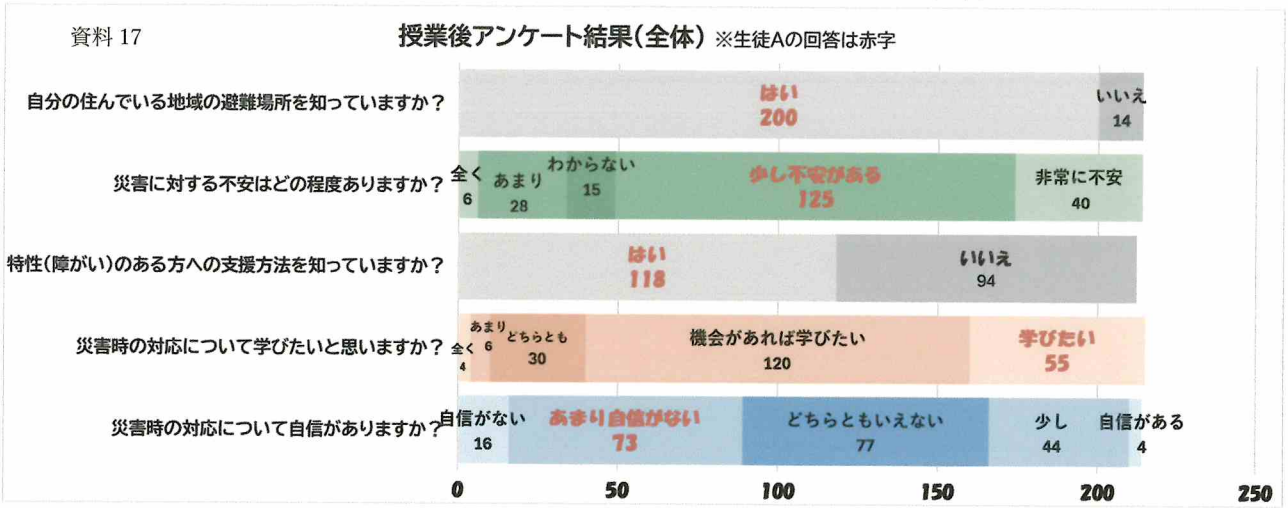
さらに、新聞発表後（資料16）には、生徒Aは「自然と大事なことの中でもさらにもっと大事なところを選んで発表」していたことに気付き、「自

分にしか分からない知識を相手に伝えることは大事」と述べていた。また、「急に災害が起きて、分からないことがあって困っている人がいたら、自分のもっている知識を相手に渡すことだってできる」と記しており、防災体験で得た知識の価値を実感し、それを社会の中で生かそうとする意識が育まれていることが分かる。

５　成果と課題

手だてＡ　防災に関するアンケートによる社会的課題への自己認識について

資料 17



授授業後アンケート（資料17）では、防災意識や行動力の向上が見られた。「特性のある方への支援方法を知っていますか？」では「はい」が増加し、生徒Ａも「いいえ」から「はい」へと変容した。これは避難所開設体験を通じて、視覚障がい者への支援方法を具体的に学んだ成果といえる。また、「災害時の対応について自信がありますか？」では、生徒Ａが「あまり自信がない」から「少し自信がある」へと変容し、体験を通して「自分にもできることがある」と感じ始めていた。さらに、新聞記事や道徳の授業では、「被災した生徒にどう寄り添う」という視点からメンタルケアの重要性に気付き、「明るい言葉をかけてあげるといった具体的な行動指針を持つようになった。「ひまわり」の授業では、「あたり前だと思っていた日々に、たくさん感謝して生きていきたい」と述べ、命の尊さや日常の価値への意識も深まった。これらの学びを通して、生徒Ａには、防災を「自分ごと」として捉え、社会的課題に対して主体的に考え、行動しようとする変容が見られた。授業内で行ったアンケートは、学習成果の可視化だけでなく、今後の指導の方向性を考える上でも有効であることが示された。

以上のことから、防災に関するアンケートを行い、社会的課題への自己認識を深める手だては有効であった。

手だてＢ　災害に関連する状況を理解する場の設定について

専門家の講演を通じて、生徒Ａが防災に関する具体的な知識を得ると同時に、それを自らの生活や地域社会の課題と結びつけて考える力を養った。講演前には「声かけの仕方」や「フェイクニュースの見分け方」など、学習目標を明確にし、「フィルターバブル」などの新しい概念にも関心を示すなど、高い目的意識をもって臨んでいた。講演後には、「自助・共助・公助」の理解を深め、「刈谷でも同じことが起こると思って、食べ物や家具の固定をし、備えていきたい」と述べるなど、防災を「自分ごと」として捉える姿勢が確認できた。また、「『ステルスマーケット』と『そうかな　だいじかな』」といった印象的なキーワードを行動に結びつけようとし、情報を選別して冷静に対応するための具体的な方略も構築していた。さらに、中日新聞 NIE 講演会を通じて、「災害時にフェイクニュースが混乱を拡大させる」という問題意識をもち、「常に冷静になって判断したい」という仮説を立て、講演後の手紙では「『そうかな　だいじかな』を活

用してフェイクニュースを見極めたい」と記述している。これらの成果から、生徒Ａは講演を単なる情報収集の場としてではなく、得た知識を生活や防災行動に応用する学びの機会として捉えており、主体的に行動を考える力を伸ばしていた。

以上のことから、専門家の講演を通じて災害に関連する状況を学び、知識を拡充する手だては有効であった。

手だてＣ　社会的課題をテーマにしたグループ討論の実施について

避難所運営ゲームの準備として実施した刈谷防災ボランティアの講演会では、生徒Ａが「私達中学生も何かボランティアできることはあるのか」「ボランティアをしてきた人たちは、どんな思いで活動をしてきたのか」と記し、主体的に学びに向かう姿勢を見せた。講演後には、「少しでも役に立とうと動いているボランティアの人はすごい」と述べ、災害時における協力や支援の意義を深く理解していた。その後の避難所運営ゲームでは、生徒Ａが「階段があるから難しいと思うよ。」といった現実的な課題を踏まえ、「一階の卓球場に物資を置いておけば、体育館（二階）にもすぐ運べる」などの解決策を提案した。また、「妊婦さんや乳幼児連れの人は、まず静かで広いスペースが必要だよね。他にも、高齢者や障がいのある人の優先順位を考えないと」と発言し、多様な立場に配慮した問題解決の視点を示した。さらに、お礼の手紙では、「重症のけがをしている人や高齢者、スマホを充電したいと言ってくる人たちには困りました」と振り返るとともに、「一人一人に配慮と温かな心を持ち、うつ病など大人数でいることが苦手な人にも理解を持って接したい」と述べ、多様性への理解と共感の姿勢が育まれていることがうかがえた。

これらの取り組みから、生徒Ａは防災活動における自分の役割を具体的に捉え、多様な視点を踏まえた柔軟な思考や他者理解の力を身に付け始めていることが確認できた。

以上のことから、社会的課題をテーマにしたグループ討論を実施する手だては有効であった。

手だてＤ　地域の方や特性のある方と交流し、体験を共有する場の設定について

避難所開設体験では、生徒Ａと生徒Ｂが視覚障がい者の役とサポート役を交互に務めた。生徒Ａは「ベッドの高さとか幅とか、もっと教えてくれたら助かるかも」と述べ、サポート役として課題を実感した。一方、生徒Ｂも「段差があるから注意してね」と声をかけたが、足が障害物に当たり、ガイドから「進む方向や歩数を正確に伝えると、より安全に案内できますよ」と助言を受ける場面も見られた。これらの体験から、生徒Ａは細かな情報提供の大切さや、支援時の配慮の必要性を学んでいた。また、お礼の言葉では「サポーターになるときは避難者側の気持ちを考えて行動することが大切」と述べ、さらに避難者側を体験して「形が分からず、今どこにいるのかもわからなかった」と記し、支援の在り方を深く考える姿勢が見られた。体験後の新聞では、「誘導する前に自己紹介をし、周りの情報を細かく教えることが大事」とまとめ、伝え方やコミュニケーションの工夫を具体的に整理していた。さらに新聞発表では、「自然と大事なことの中でもさらにもっと大事なところを選んで発表したい」「自分にしか分からない知識を相手に伝えることは大事」と振り返っており、得た知識を整理し、他者に伝える意義を実感している様子がうかがえた。

以上のことから、地域の方や特性のある方と交流し、体験を共有する場を設定する手だては有効であった。

６　研究の課題

防災意識を「自分ごと」として捉える学びは見られたが、日常の行動への定着には継続的な仕組みづくりが課題である。地域活動や実践の場との連携が今後の課題となる。また、特性のある方への理解を深める指導を全体に広げ、偏見や無理解を乗り越える体験的な学習の充実が求められる。